

ジュラシック・トーク

ドイツ語による表情記号の起源

「音楽に国境はない」とはよく言われることですが、現実にはそれほど楽天的なものではありません。ただ、確かにこれが当てはまる場合もあります。それは、主にクラシック音楽です。そこで使われている楽譜では、音符によって音の高さや長さを細かく指定できますし、それ以外の情報、例えばテンポや表情も言葉によってさらに詳しく指示されていて、作曲家の意図をかなり正確に伝えられます。そして、その時に用いられるのはイタリア語です。なんたって、イタリアはクラシック音楽発祥の地ですから、そこで生まれたこのやり方は、全ヨーロッパへと広がることになるのです。それは、クラシック音楽の中心地がドイツ語圏の国々に移っても、変わりませんでした。オーストリアのウィーンを中心に活躍したモーツァルトやベートーヴェンといった大作曲家たちも、その楽譜にはイタリア語でテンポや表情などを書き連ねたのです。

ところが、今回演奏することになった、ドイツの作曲家ロベルト・シューマンが作った「交響曲第3番（ライン）」では、なんと、そのようなものがドイツ語で書かれています。

正確には、シューマンは交響曲に関しては、1841年に作った「第1番」と「第4番（初稿）」、1846年に作った「第2番」では、イタリア語を使っていました。それをドイツ語に変えたのは、1850年に作ったこの「第3番」が初めてだったのです。その後、1851年に「第4番」を改訂した時にも、イタリア語をドイツ語に直しています。確信はありませんが、もしかしたら「交響曲第3番（ライン）」は、音楽史上初めて、ドイツ語によって表情記号が書き込まれた交響曲なのではないでしょうか。

交響曲第1番（1841）

- I. Andante un poco maestoso -
Allegro molto vivace
- II. Larghetto
- III. Scherzo. Molto vivace
- IV. Allegro animato e grazioso

交響曲第4番初稿（1841）

- I. Andante con moto - Allegro di molto
- II. Romanza: Andante
- III. Scherzo: Presto
- IV. Largo - Finale. Allegro vivace

交響曲第2番（1846）

- I. Sostenuto assai - Un poco più vivace -
Allegro, ma non troppo
- II. Scherzo: Allegro vivace
- III. Adagio espressivo
- IV. Allegro molto vivace

交響曲第3番（1850）

- I. Lebhaft
- II. Scherzo: Sehr mäßig
- III. Nicht schnell
- IV. Feierlich
- V. Lebhaft

交響曲第4番改訂稿（1851）

- I. Ziemlich langsam - Lebhaft
- II. Romanze: Ziemlich langsam
- III. Scherzo: Lebhaft
- IV. Langsam - Lebhaft

ただ、シューマンの場合、交響曲以外のジャンルの作品では、もっと早い時期からドイツ語を使い始めています。それは、どうも1835年あたりからのようですね。

これは、もっと前の作曲家、フランツ・シューベルトの場合にも当てはまります。彼は交響曲などでは終生イタリア語で表記していましたが、リートでは初期にはイタリア語だったものが、1814年頃からドイツ語に変わっています。やはり、ドイツ語の歌詞で歌われるリートの場合は、ドイツ語の方がより情感が伝わると考えたのでしょう。同じように、ワーグナーは、1845年の「タンホイザー」まではイタリア語（一部ドイツ語による書き込みもあり）で、全部ドイツ語を使うようになるのは1848年の「ローエングリン」からです。さらに、ブラームスなどは、交響曲では最後までイタリア語を使い続けました。ただ、それ以外のジャンルでは、時たま、思い出したようにドイツ語を使っているのですけどね。

ブルックナーあたりは、彼の最初の作品である合唱曲「Pange lingua」で、すでにドイツ語を使っています。しかし、その後はイタリア語とドイツ語を並行して使うようになっています。交響曲の場合では、楽章ごとにドイツ語とイタリア語が使い分けられています。

Nr. 1 Pange lingua C-Dur

Langsam vgl. Nr. 39 1835 oder 1836

Sopran
Pan - ge lin - gua glo - ri - o - si cor - po - ris my - ste - ri -

Alt
Pan - ge lin - gua glo - ri - o - si cor - po - ris my - ste - ri -

Tenor
Pan - ge lin - gua glo - ri - o - si cor - po - ris my - ste - ri -

Baß
Pan - ge lin - gua glo - ri - o - si cor - po - ris my - ste - ri -

交響曲へ短調 (1863)

I. Allegro molto vivace

II. Andante molto

III. Scherzo. Schnell

IV. Allegro

交響曲第9番 (1896)

I. Feierlich, misterioso

II. Scherzo. Bewegt, lebhaft; Trio. Schnell

III. Adagio. Langsam, feierlich

Finale (incomplete). Misterioso, nicht schnell

もう少し後の作曲家、グスタフ・マーラーも、基本的にはドイツ語ですがイタリア語も併用しています。なんたって、彼の最大のヒット曲のタイトルは「アダージェット」ですからね。同じ頃に生まれたリヒャルト・シュトラウスは、最初はイタリア語だったものが、ある時からドイツ語に変わるという、シューマンと同じ道を歩んでいます。そんなところを、右ページの図にまとめてみました。20世紀に入ると、かなりのドイツの作曲家はドイツ語の表記を使うようになったようです。

同じことはフランスの作曲家の場合にも起こっています。彼らは、やはり自国語で表情記号を記すようになりました。しかし、それ以外の国では、あえて自国語を使うことはなく、イタリア語が使われているようです。やはり、もはや「イタリア語」とは気づかれないほどに生活の中になじんでいる「アレグロ」とか「ラルゴ」といった言葉たちは、決してなくなることはないのでしょう。ま、こんなの (→) もありますが。

三条中学校校歌

中澤淳式作詞
福井文彦作曲

明3<.元歌3< (♩=108)

(前奏)

一. モリノミヤ
二. もりのみや
三. モリノミヤ

